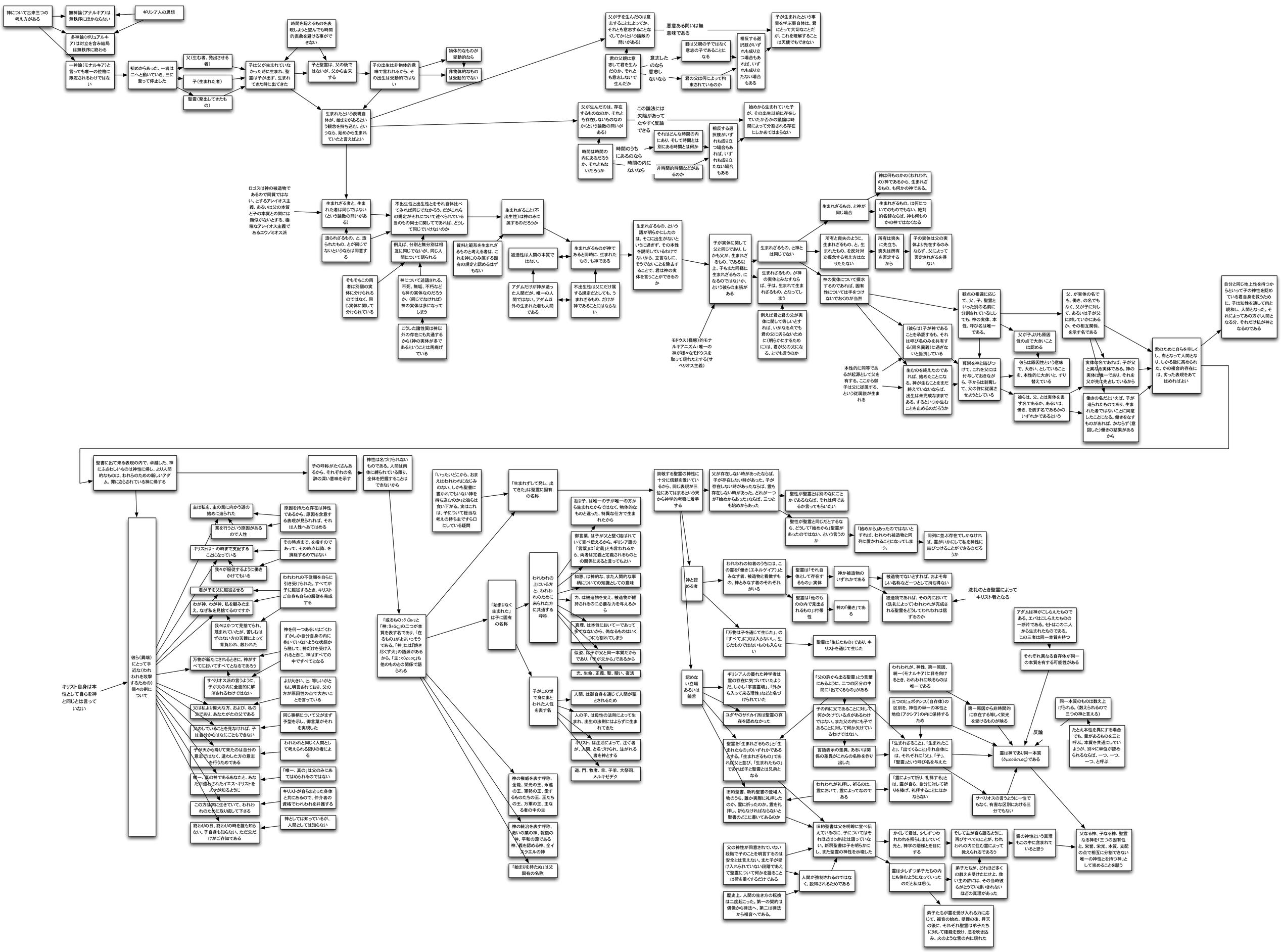
神について古来三つの考え方がある
無神論(アナルキア)は無秩序にほかならない
ギリシア人の思想
多神論(ポリュアルキア)は対立を含み結局は無秩序に終わる
一神論(モナルキア)と言っても唯一の位格に限定されるわけではない
初めからあった、一者は二へと動いていき、三に至って停止した
父(生む者、発出させる者)
子(生まれた者)
聖霊(発出してきたもの)
子は父が生まれていなかった時に生まれ、聖霊は子が出ず、生まれてきた時に出てきた
時間を超えるものを表現しようと望んでも時間的表象を避ける事ができない
子と聖霊は、父の後ではないが、父から由来する
子の出生は非物体的意味で言われるから、その出生は受動的ではない
物体的なものが受動的なら
非物体的なものは受動的でない
生まれたという表現自体が、始まりがあるという観念を持ち込む、というなら、始めから生まれていたと言えばよい
父が子を生んだのは意志することによってか、それとも意志することなくしてか(という論敵の問いがある)
悪意ある問いは無意味である
子が生まれたという事実を学ぶ事自体は、君にとって大切なことだが、これを理解することは天使でもできない
君の父親は意志して君を生んだのか、それとも意志しないで生んだか
意志したのなら
意志しないなら
君は父親の子ではなく意志の子であることになる
君の父は何によって拘束されているのか
相反する選択肢がいずれも成り立つ場合もあれば、いずれも成り立たない場合もある
父が生んだのは、存在するものなのか、それとも存在しないものなのか(という論敵の問いがある)
この論法には欠陥があってたやすく反論できる
始めから生まれていた子が、その出生以前に存在していたか否かの議論は時間によって分割される存在にしかあてはまらない
それはどんな時間の内にあり、そして時間とは別にある時間とは何か
時間は時間の内にあるだろうか、それともないだろうか
時間のうちにあるのなら
時間の内にないなら
非時間的時間などがあるのか
相反する選択肢がいずれも成り立つ場合もあれば、いずれも成り立たない場合もある
ロゴスは神の被造物であるので同質ではない、とするアレイオス主義、あるいは父の本質と子の本質との間には類似がないとする、極端なアレイオス主義であるエウノミオス派
生まれざる者と、生まれた者は同じではない(という論敵の問いがある)
造られざるもの、と、造られたもの、とが同じでないというならば同意する
不出生性と出生性とをそれ自体比べてみれば同じでなかろう。だがこれらの規定がそれについて述べられている当のもの同士に関してであれば、どうして同じでいけないのか
例えば、分別と無分別は相互に同じでないが、同じ人間について語られる
そもそもこの両者は別個の実体に分けられているのではなく、同じ実体に関して分けられている
神について述語される、不死、無垢、不朽なども神の実体なのだろうか、(同じでなければ)神の実体は多になってしまう
こうした諸性質は神以外の存在にも共通するから(神の実体が多であるということは馬鹿げている
生まれざるもの(不出生性)は神のみに属するのだろうか
質料と範形を生まれざるものと考える者は、これを神にのみ属する固有の規定と認めるはずもない
被造性は人間の本質ではない。
アダムだけが神が造った人間だが、唯一の人間ではない。アダム以外の生まれた者も人間である
生まれざるものが神であると同時に、生まれたもの、も神である
不出生性は父にだけ属する規定だとしても、うまれざるもの、だけが神であることにはならない
生まれざるもの、という語が明らかにしたのは、そこに出生がないという(に過ぎず、その本性を説明しているわけでないから、立言なしに、そうでないことを除去することで、君は神の実体を言うことができるのか
子が実体に関して父と同じであり、しかも父が、生まれざるもの、である以上、子もまた同様に生まれざるもの、になるのではないか、という彼らの主張がある
モドウス(様態)的モナルキアニズム:唯一の神が様々なモドウスを取って現れたとする(サベリオス主義)
生まれざるもの、と神とは同じでない
生まれざるもの、が神の実体とみなすならば、子は、生まれて生まれざるもの、となってしまう
例えば君と君の父が実体に関して等しいとすれば、いかなる点でも君の父に劣らないために(明らかにするために)は、君が父の父になる、とでも言うのか
生まれざるもの、と神が同じ場合
神は何ものかの(われわれの)神であるから、生まれざるもの、も何かの神である。
生まれざるもの、は何についてのものでもない、絶対的名辞ならば、神も何もの かの神ではなくなる
所有と喪失のように、生まれざるもの、と、生まれたもの、を反対対立概念する考え方はなりたたない
所有は喪失に先立ち、喪失は所有を否定するから
子の実体は父の実体より先在するのみならず、父によって否定されざるを得ない
神の実体について探求するのであれば、固有性については手をつけないでおくのが当然
本性的に同等であるが起源として父を有する。ここから御子は父に従属する、という従属説が生まれる
(彼らは)子が神であることを承認するも、それは呼び名のみを共有する(同名異義)に過ぎないと抵抗している
生むのを終えたのであれば、始めたことになる。神が生むことをまだ終えていないならば、出生は未完成なままである。するといつか生むことを止めるのだろうか
観点の相違に応じて、父、子、聖霊といった別の名前に分割されているにしても、神の実体、本性、呼び名は唯一である。
父が子よりも原因性の点で大きいことは認める
尊崇を神と結びつけて、これを父には付与しておきながら、子からは剥奪して、父の許に従属させようとしている
彼らは原因性という意味で、大きい、としていることを、本性的に大きいと、すり替えている
彼らは、父、とは実体を表す名であるか、あるいは、働き、を表す名であるかのいずれかであるという
父、が実体の名でも、働き、の名でもなく、父が子に対して、あるいは子が父に対していかにあるか、その相互関係、を示す名である
実体の名であれば、子が父と異なる実体である。神の実体は唯一であり、それを父が先に先占しているから
働きの名だといえば、子が造られたものであり、生まれた者ではないことに同意したことになる。働きをなすものがあれば、かならず(意図した)働きの結果があるから
君のために自らを空にし、肉となって人間となり、しかも後に高められた、かの複合的存在には、劣った表現をあてはめればよい
自分と同じ地上性を持つからといって子の神性を貶めている君自身を救うために、子は知性を通して肉となる分、それだけ私が神となるのである
聖書に出て来る表現の内で、卓越した、神にふさわしいものは神性に帰し、より人間的なものは、われらのための新しいアダム、罪にさらされている神に帰する
子の呼称がたくさんあるから、それぞれの名辞の深い意味を示す
神性は名づけられないものである。人間は肉体に縛られている限り、全体を把握することはできないから
彼ら(異端)にとって手近な(われわれを攻撃するための)個々の例について
主は私を、主の業に向かう道の始めに造られた
原因を持たぬ存在は神性であるから、原因を含意する表現が見られれば、それは人性へあてはめる
業を行うという原因があるので人性
キリストは…の時まで支配することになっている
その時点まで、を指すのであって、その時点以降、を排除するのではない
我々が服従するように働きかけてもいる
君が子を父に服従させる
わが神、わが神、私を顧みたまえ、なぜ私を見捨てるのですか
われわれの不従順を自らに引き受けられた。すべてが子に服従するとき、キリストご自身も自らの服従を完成する
我々はかつて見捨てられ、蔑まれていたが、苦しむはずのない方の苦難によって背負われ、救われた
万物が新たにされるときに、神がすべてにおいてすべてとなるであろう
神を何一つあるいはごくわずかし、自分自身の内に抱いていないような状態から脱して、神だけを受け入れるときに、神はすべての中ですべてとなる
サベリオス派の言うように、子が父の内に全面的に解消されるわけではない
より大きい、と、等しいが、ともに明言されており、父の方が原因性の点で大きいことを言っている
父は私より偉大な方、および、私の父であり、あなたがたの父である
同じ事柄について父がまず予型を示し、御言葉がそれを実現した
父のしていることを見なければ、子は自分からはなにごともできない
われわれと同じく人間として考えられる限りの者による
子が天から降りて来たのは自分の意志ではなく、遣わした方の意志を行うためである
唯一、真の神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを人々が知るように
「唯一、真の」は父のみにあてはめられるのではない
キリストが自らまとった身体と共にあるので、仲介者の資格でわれわれを弁護する
この方は常に生きていて、われわれのために取り成して下さる
神としては知っているが、人間としては知らない
終わりの日、終わりの時を誰も知らない。子自身も知らない。ただ父だけがご存知である
キリスト自身は本性として自らを神と同じとは言っていない
「いったいどこから、おまえはわれわれになじみのない、しかも聖書に書かれてもいない神を持ち込むのか」と彼らは食い下がる。実はこれは、子について理当な考えの持ち主ですら口にしている疑問
「生まれずして発し、出てきた」は聖霊に固有の名称
「或るもの:ὁ ὤν」と「神:θεός」のこつが本質を表す名であり、「在るもの」がよりいっそうである。「神」にはは「焼き尽くす火」の語源があるから、「主:κύριος」も他のものとの関係で語られる
「始まりなく生まれた」は子に固有の名称
われわれの上にいる方と、われわれのために来られた方に共通する呼称
独り子、は唯一の子が唯一の方から生まれたからではなく、物体的なものと違った、特異な仕方で生まれたから
御言葉、は子が父と堅く結ばれていて宣べ伝えるから。ギリシア語の「言葉」は「定義」とも言われるから、両者は定義と定義されるものとの関係にあると言ってもよい
知恵、は神的な、また人間的な事柄についての知識としての意味
力、は被造物を支え、被造物が維持されるのに必要な力を与えるから
真理、は本性において一であって多でなければ、偽なるものはいくつにも割れてしまう
似姿、は子が父と同一本質だからであり、「父が父から」であるから
光、生命、正義、聖、贖い、復活
子がこの世で身体にまとわれた人性を表す名
人間、は御自身を通じて人間が聖とされるため
人の子、は母性の法則によって生まれ、出生の法則にはよらずに生まれてきた
キリスト、は注油によって、注ぐ者が、人間、と名づけられ、注がれる者を神とする
道、門、牧者、羊、子羊、大祭司、メルキゼデク
神の権威を表す呼称、全能、栄光の王、永遠の王、軍勢の王、愛するものたちの王、王たちの王、万軍の主、主なる者の中の主
神の統治を表す呼称、救いの業の神、報復の神、平和の源である神、義を認める神、全イスラエルの神
「始まりを持たぬ」は父固有の名称
崇敬する聖霊の神性に十分に信頼を置いているから、同じ表現が三位にあてはまるという天から神学的考察に着手する
父が存在しない時があったならば、子が存在しない時があった。子が存在しない時があったならば、霊も存在しない時があった。どれが一つが「始めからあった」ならば、三つとも始めからあった
聖性が聖霊とは別のなにごとかであるならば、それは何であるか言ってもらいたい
聖性が聖霊と同じだとするなら、どうして「始めから」聖霊があったのではない、という言うのか
「始めから」あったのではないとすれば、われわれ被造物と同列に置かれることになってしまう。
同列に並ぶ存在でしかなければ、霊がいかにして私を神性に結びつけることができるのだろうか
神と認める者
われわれの知者のうちには、この霊を「働き(エネルゲイア)」とみなす者、被造物と看做すもの、神とみなす者のそれぞれがいる
聖霊は「それ自体として存在するもの」:実体
神か被造物のいずれかである
被造物でないとすれば、およそ尊い名称などーつとして持ち得ない
被造物であれば、その内において(洗礼によって)われわれが完成される聖霊をどうしてわれわれは信ずるのか
聖霊は「他のものの内で見出されるもの」:付帯性
神の「働き」である
洗礼のとき聖霊によってキリスト者となる
「万物は子を通じて生じた」の「すべて」に父は入らないし、生じたものではないものも入らない
聖霊は「生じたもの」であり、キリストを通じて生じた
認めない立場あるいは鏡舌
ギリシア人の優れた神学者は霊の存在に気づいていたようだ。しかし「宇宙霊魂」、「外から入って来る理性」などと名づけられていた
ユダヤのサドカイ派は聖霊の存在を認めなかった
聖霊を「生まれざるもの」と「生まれたもの」のいずれかであるとする、「生まれざるもの」であれば父と並び、「生まれたもの」であれば子と聖霊とは兄弟となる
旧約聖書、新約聖書の登場人物のうち、誰が実際に礼拝したのか、霊に祈ったのか、霊を礼拝し、祈らなければならないと聖書のどこに書いてあるのか
「父の許から出る聖霊」とう言葉にあるように、二つの区分の中間に「出てくるもの」がある
子の内に父であることに対して何か欠けている点があるわけではない、また父の内にも子であることに対して何か欠けているわけではない。
言語表示の差異、あるいは関係の差異がこれらの名称を作り出した
われわれが礼拝し、祈るのは、霊において、霊によってなのである
旧約聖書は父を明瞭に宣べ伝えているのに、子についてはそれほどはっきりとは語っていない。新約聖書は子を明らかにし、また聖霊の神性を示唆した
父の神性が同意されていない段階で子のことを明言するのは安全とは言えない。また子が受け入れられていない段階であえて聖霊について何かを語ることは荷を重くするだけである
人間が強制されるのではなく、説得されるためである
歴史上、人間の生き方の転換は二度起こった。第一の契約は偶像から律法へ、第二は律法から福音へである。
かくして君は、少しずつわれわれを照らし出していく光と、神学の階梯とを目にする
霊は少しずつ弟子たちの内にも住むようになっていったのだと私は思う。
弟子たちが霊を受け入れる力に応じて、福音の始め、受難の後、昇天の後に、それぞれ聖霊は弟子たちに対して機能を投げ、息を吹き込み、火のような舌の内に現れた
そして主が自ら語るように、再びすべてのことが、われわれの内に住む霊によって教えられるであろう
弟子たちが、どれほど多くの教えを受けたにせよ、救い主の許には、その当時彼らがとうてい担いきれないほどの真理があった
霊の神性という真理もこの中に含まれていると思う
父なる神、子なる神、聖霊なる神を「三つの固有性と、栄誉、栄光、本質、支配の点で相互に分割できない唯一の神性とを持つ神」として崇めることを願う
アダムは神がこしらえたものである。エバはこしらえたものの一断片である。セトはこの二人から生まれたものである。この三者は同一本質を持つ
それぞれ異なる自存体が同一の本質を有する可能性がある
われわれが、神性、第一原因、統一(モナルキア)に目を向けるとき、われわれに映るものは唯一である
第一原因から非時間的に存在する等しく栄光を受けるものが映る
三つのヒュポタシス(自存体)の区別を、神性の単一の本性と地位(アクシア)の内に保持するため
反論
霊は神であり同一本質(ὁμοούσιος)である
同一本質のものは数え上げられる。(数えられるので三つの神と言える)
たとえ本性を異にする場合でも、量があるものを三と呼ぶ。本質を共通にしていようが、別々に単位が認められるならば、一つ、一つ、一つ、と呼ぶ
「生まれざること」、「生まれたこと」、「出てくること」それ自体には、それぞれに「父」、「子」、「聖霊」という呼び名を与えた
サベリオスの言うように一性でもなく、有害な区別における三分でもない
「霊によって祈り、礼拝する」とは、霊が自ら、自分に対して祈りを捧げ、礼拝することにほかならない